
愚者処

向日アオイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者処

【Nコード】

N6315A

【作者名】

向日アオイ

【あらすじ】

男の子と少女、そして青年がいた。三人は、それぞれ重い過去を抱え、そんなものよりずっと重い現実の中を生きてきた。三人は、愚者処 と言う組織に属していた。 いや、属させられていた。そんな三人の前に、一人の少女が現れる。自らを未熟者だと称すその少女は、しかし三人に救いの手を差し伸べて

水無月も下旬、雨の季節が過ぎ去り、初夏を迎える頃合いであった。

森の中。

さも凪ぐように、そいつは少女の身体を吹っ飛ばした。

「ッ！」

上げかけた悲鳴が喉につつかえ、呼気となって漏れた。遅れて背中に激痛。どうやら樹木にぶつかつたようであったが、そんなことを判断する余裕はもう少女には残されていなかった。

苦痛に顔を歪めながら開いた目にはまず、紅の地に二、三の大きな花菱を散らした自らの着物が映つた。いつも着ている、質素で古びた骨董品のような着物である。

少女は徐々に顔を上げ、視線を上へとずらしていく。最初は薄ぼんやりしていた視界もだんだんはつきりとしてきた。雑草を点々と生やした固い地面、痩せこけたように細々と林立した木の幹、そしてそれらの間からこちらを覗く、血のような緋の瞳

「！！」

そこにいたのは、夜闇のような黒をした、見紛うことなき悪鬼であった。体長は九尺弱ほどの巨体、高い位置にある頭から突き出す二本の角。

何も考えずに、少女はその姿をぼんやりと眺めていた。もしかしたら、頭を強く打つたのかもしれない。危機感は、まるで感じなかった。

その瞬間までは。

不意に、太い腕が伸びてきた。逃れる間もなく闇色のその腕は少女の首をひっ掴み、ぶらりとそのまま持ち上げる。

「ッ、くっ……！」

無意識に喉から声が漏れ、同じく無意識に

手が動いた。両手を使って悪鬼の手を引き剥がそうとするが、相手の力が強いのかこちらの力が弱いのか（多分両方だ）、一向にそれが叶う様子は見られなかった。

悪鬼は、意地の悪い瞳で微笑んでいた。にたりと口端を吊り上げつつ、何かを呟く。

丁度いいところに

そんな感じの言葉が確かに聞き取れた。さも掲げるように腕をまっすぐ伸ばして、血の瞳でこちらを見つめる。

（何、が起こって……）

身長之差か、少女の足が地を踏むようなことはなかった。ただ、十歳すぎくらいの身体が空中にぶらつきバタついている。カランと音がして、右の足から下駄が脱げたのが解った。

悪鬼は少女を手を持ったまま、くるりと回れ右をした。そして前方に少女を突き出す。

不意に、悪鬼は高らかに笑い始めた。森中に響くような大声で。地の底から這い上がるような低い声で。

「見たか！ 我は人質を得たぞ！」

そのまま、発狂するように声を張り上げる。

「人質の命が惜しければ、我のことは諦めるがよい！」

そして再び、こらえもせず大声で笑い始めた。狂ったように。何が起こったのか、全く理解ができない。

それが、素直な考えであった。相手が為そうとしていることも解らなければ、何故それに自分が巻き込まれたのかも解らない。ただ解るのは、

自分は何かに巻き込まれた。しかも、人質とか言う最悪な状態で。その一点。

狂った笑い声は、とどまるところを知らなかった。時間が経つのに比例して、悪鬼の腕の力も強くなる。ギリギリと、文字通り頭が締め付けられ、痛みに喉から声が漏れた。

（何故、こんなことに……？）

浮かんだ感情は、恐怖でも何でもなく、ただ哀しみだった。自分は何故こんな目に遭っているのだろう。ただ、それだけが哀しく感じられた。

（これ、は……、もしかしたら）

一瞬、閃くようにそれは浮かんだ。

（もしかしたらこれは、罰なのかもしれない……）

そう。罰。

これはもしかしたら、何に対しても到らない自分への罰なのかも、と。

（それは……、当然、ですね）

腕がぶらり、と下げられた。それが故意なのか無意識なのか、もう少女本人にも解らない。

（でも、残念です、……ね）

そして、微笑む。左足の下駄までが脱げてしまいそうなのが解った。

瞼が、重い。それに逆らってもせずに、静かに少女は目を閉じた。

（わたしはどうやら……、最期まで、バカなようです……）

完全に脱力。意識が徐々に、しかし確実に遠のく。少女は指一本動かさない。いや、動かせないのか。

（今の今になって人の役に立ちたいと思うなんて、わたしはなんて

……、愚か、なのでしょう……）

そこまで考えたところで、意識は完全に、閉じた。

吉・際会 1 (前書き)

ちょっと戦闘シーン含まれます。苦手な方はご遠慮ください。

見覚えのある光景が、目の前で繰り広げられていた。

「くそっ……」

若い少年は、それを睨んで小声で呟いた。舌打ちだけは潜ませずに露骨だったが、しかし相手がこちらの存在に気付くことはなかった。

相手 黒い身体の悪鬼は、ただ高らかに笑っていた。

「ミサワ。落ち着きなさい」

隣から、美貌の少女の囁き声。落ち着きすぎている少女のその言葉に、

「……落ち着いてられるかよ」

声音を潜めつつ、苛立ちながらこちらも囁き返す。

少年の視線は、ただ一人の少女を見つめていた。それは、彼の隣にいる美貌の少女ではなく、悪鬼に頭を掴まれがく、少年よりも少し年上くらいの少女であった。

あんまりのんびりしていると、手遅れになる。それは、この場の人間は皆、重々承知のことであった。

「ユズの言うとおりだ」

また声がした。今度は、青年の声。こちらもまた落ち着ききつた声であったが、先の少女よりは人間味があるように感じられる声であった。

「焦りと動揺はミスを誘う。ミスをしたことで泣くのはお前だぞ」

しかし、言うことは厳しい。そして、まさにその通りであった。美貌の少女も、今の青年も、別にあの少女の死を哀しむことはないのである。そして、自分だけが哀しむのだ。少女を救えなかった、と。

「……っ」

反論はできなかった。しかし、焦る気持ちは止まらない。あの

少女は何を思うのだろう。何を思って、あそこで

助けて……っ、殺さ、ないで……！

「！」

じつとりと、脂汗が浮かんだ。それが自分でもよく解り、一瞬にして気分が悪くなった。

「……」

思えば、少女がその言葉を口にしていないのは奇跡に近かった。

いつの間にか荒くなつた口調を整えにかかる。急がねばいけな

い、落ち着け、急がなければあの子はオチツケ　！！

ひんやりと、手が首筋に触れた。

「……ミサワ」

呼ばれる名に何も考えず振り向くと、すぐ傍に美貌の少女の顔。金の髪に瑠璃の瞳、そして白い肌。

自分に触れるこの手も少女のものだと思つと、条件反射で身が強ばつた。

「今更考えても遅いわ。あなたはただ、落ち着くことだけを考えるの」

真剣なのかそうでないのか、その表情はいつもと大差ないのでよく解らない。

落ち着け。

自分に、言い聞かせる。目を閉じて、深く深呼吸。そして、目を開くと、

「……」

考えるより先に身体が動いた。肩を抱くように首筋に触れる金髪少女の手を振りほどき、焦るように駆け出した。

少女が、悪鬼の手の中でぐったり動かなくなっていた。

「ち、ちよっとミサワ！　待ちなさいよ！」

金髪少女の声がする。

「まだその子、気絶してるか解らないのよ!？」

知るか。少年にとって、それは本当に知ったことではなかった。手遅れになる前に。

ただそれだけを、考えていた。

「……………」

右手に集中。想像するのだ。手の周りを渦巻く雷。あの少女を救うことのできる、素早き刃。

バチッ。そんな音が確かに右手付近で発生した。わざわざ確認はしない。そこに確かに、雷はある。

左手では、ポケットから小型のナイフを取り出す。この間約数秒。慣れた手つきの自分に少し嫌悪を抱きつつ、こちらに気付かぬ悪鬼に素早く近付き、

ナイフで、少女を持ったその手に深い切り傷を入れた。

この世のものとは思えぬ絶叫が、笑い声の代わりに辺りに木霊する。悪鬼が手を自らへと引きつけると同時に少女の身体は地面へと崩れ落ちる。

今は、生存確認など後回しだ。

左手で、ナイフをきつく掴み直す。何かドロツとした液体が、確かに手に触れるが気に留めない。

再び駆け出す。悪鬼の懐へと。そして、それを阻止する右手へナイフを突き立てた。

再び絶叫、同時に、

バチッ

左手から肘までにかけてを、渦巻くように包んでいた雷が、大きく音を立てた。

少年は、その小さな右手を拳に握り、素早く悪鬼の腹部を殴打した。すると素早く、音を立てながら雷は悪鬼の身体へ流れていく。

叫びは、すでに声になってはいなかった。少年は再び想像。悪鬼に落ちる、巨大な雷。

轟いた。

悲鳴が、掻き消える。

辺りが光に照らされ、影が濃く地面に映し出され、その光がやむとき、悪鬼は黒い焦げとなってその場に倒れた。

「！」
少年は、次に慌てて振り返る。そこには少女がいるのだ。生存確認を

……すでに、する必要などなかった。

少女は、その場に座り込み、驚く瞳でこちらを見つめていた。驚きと、恐れに含まれる瞳で。

そして、

「ちよっ、おい！」

少年と目があったその瞬間、ふらり、と倒れ込んだ。

「で、どうするの？」

「……宿まで運ぶ。それしかねえだろ」

金髪少女へ、少年は溜め息を吐きつつ返した。

「言っと思ったわ」

予測通りの返事が返り、再び溜め息を吐く。

「それで？ そのあとはどうするの？」

二つ目となる、その少女の問いに、青年に抱え上げられた少女をちらりと見て、

「……着いてから、考える」

ぼそりと呟いた。情けなくて、顔が上げられなかった。

「……言っつと、思ったわ」

少女が、先ほどよりもずっとずっと呆れた口調で、同じ言葉を繰り返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315a/>

愚者処

2010年10月11日05時48分発行